



今号のミラノ通信では、ミラノサローネ・スペシャルの後編としてフォーリサローネをご紹介します。

ここ数年、世界主要都市で開催されているデザインのイベントに足並みを揃えて、ミラノサローネ開催期間に連動して行なわれるデザインのイベントを一括りにした「ミラノ・デザインウィーク」という名称も浸透してきました。

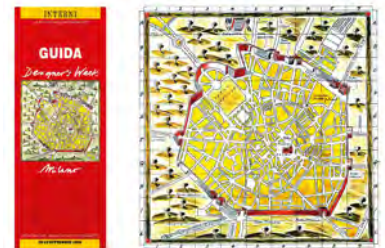
しかし、そんな世界の流れを先取りするかのように、フォーリサローネは80年代に、オーガナイザーも主催者もない中、家具関連企業の発案によって自然発生的にスタートしました。そして、その数年後、1990年にデザイン誌INTERNIがフォーリサローネイベントガイドを初めて発刊したことで、一般に知れ渡ることになりました。

毎年、その数も規模も拡張の一途を辿る見本市会場外イベントですが、今年のテーマ「Materia Natura (素材と自然)」に向け、最大のアクセス数を誇るプラットフォームfuorisalone.itへは1125ものイベントの開催登録がありました。昨年に比べ30%の増加を記録しています。Confcommercio (イタリア商業同盟)の推定によれば、ミラノサローネとフォーリサローネを合わせた経済効果は2億6100万ユーロに及ぶそうです。街中に限りなく点在するイベントを訪れた人数については正式な統計がありませんが、4月15日から21日までの6日間でその数は約50万人とされています。

姉妹提携を結ぶ大阪市よりやや小さいミラノ市、その中で主に旧市街にイベントが集中しています。昨年には、大聖堂から北東へ1kmぐらいの距離から扇形に広がるエリアをカバーするPorta Venezia Design Districtが新たに誕生しています。これまでにこの地区内でもいくつかのイベントが開催されていましたが、一目で位置関係が分かる案内地図やイベント内容を記載したパンフレットを制作し、積極的なプロモートを開始しました。今年のテーマは「DESIGN FOR EVERYTHINK」です。

「Universo Satellite」 - 25年間の軌跡を辿る

ミラノサローネの併催イベントとして、ミラノトリエンナーレではサローネサテリテ開催第25回目を祝う「Universo



© www.internimagazine.it

INTERNIのフォーリサローネ・イベントガイド第一号。



© Salone del Mobile.Milano

スカラ広場に出現したデザイン書籍を扱うDESIGN KIOSK。



© Porta Venezia Design District

地区内にあるデザイン学校 Rafflles Milanoの学生が手がけたビジュアルデザイン。

「Satellite」が開催されました。この展覧会のタイトルには、ミラノサローネのサテリテ（衛星）として誕生したサローネサテリテが、今や独自のUniverso（宇宙）にまで発展を遂げた、その軌跡を辿る意味が込められています。1998年、Marva Griffinによって初めて開催された第一回目から25年間の歴史が、それぞれの年を象徴する参加作品、年毎の参加者のリストを添えた展示パネル、そして写真やデッサン、プロトタイプなど、豊富な史料を駆使して紹介されました。各々の時代の息吹を感じさせるデザインへのアプローチや方向性、またそれらを具現化した当時の新素材と技術・形状を一同に鑑賞させます。Marva Griffinの監修のもと、キュレーターのBeppe Finessiが構成し、studio òbeloが手がけるグラフィックデザインに包まれた空間で、デザインの明らかな進化が見てとれました。そしてその中に、LUCE PLAN社のショールームで前日見かけた、ハンガリー人デザイナーZsuzsanna Horvathのペンダントライト「Illan」を見つけました。2019年に若手デザイナーとしてサローネサテリテへ出展し、2020年にLUCE PLAN社に製品化された作品です。25年の間に、こうしていくつもの作品がサローネサテリテが目標として掲げる「若手デザイナーと企業の出会い」を経て、世に送り出されていったという事実こそが、世界に類を見ない若手デザイナーの夢の工場と言われる所以だと感じました。



© Salone del Mobile.Milano

ミラノトリエンナーレで開催された「Universo Satellite」展のエントランス。



© Salone del Mobile.Milano

同じく、会場風景。

「Torre al Parco」 - ミラノの高層マンション・第一号モデル

ミラノトリエンナーレの近くにある不思議な高い建物。列車がカドルナ駅へ到着する前に唐突に右手に現れる高層住宅。以前から気になっていました。偶然にも、ミラノの近代建築物の保存や再評価の推進を手がける建築家Stefano Suriano (adurbem.it主宰) が、ミラノ・デザインウィークに合わせてこの建物の見学ツアーを実施すると聞き、さっそく参加してきました。

マンションの名前はTorre al Parco（公園の中のタワー）。1953年から1956年にかけて建築家Vico MagistrettiとFranco Longoniにより設計された地上21階地下3階の建物です。スフォルツェスコ城背面から郊外に向けて広がる、ミラノ市内で最大のセンピオーネ公園を間近に眺めることができる立地から、この名がつけられました。見学ツアーは、建設された時代背景の説明から始まりました。1950年代のイタリアは、第二次世界大戦後の急速な復興に続く好景気をバックに、建築の傑作が生まれ始めた時代でした。空襲で多くの建物が破壊されたミラノでは実験的な都市計画が行われ、中でも高層ビルは当時新しく誕生した富裕層の自己誇示の要求に応える一つの答えとしてその役割を担っていました。Gio Pontiが設計した「Grattacielo Pirelli (1952-61)」



© urbanfile.org

公園側から見たTorre al Parcoの全体像。



中央に配置された、螺旋階段。

BBPR設計の「Torre Velasca (1950-58)」などがあの頃にミラノで建設された最も有名な高層ビルですが、オフィスと住宅が一つの建物の中に機能的に組み合わせられたこれらの建築と異なり、Torre al Parcoは建築空間のすべてを居住空間として使い、そうしたことから現代の高層マンションの最初のモデルになったと見做されています。基盤はL字型、その内側の角へエレベーターと階段があり、両翼へ各階2つの住居が配置されています。興味深いのは、階段は公園と反対の面に位置づけられた勝手口へ接続する反面、リビングには床から天井までの大きな窓やベランダが配され、四季折々の公園の風景とミラノの街のスカイラインを眺められるように設計されている点です。表はオーナーのため、裏は使用人用と、明確に区分されて考えられた間取りは、当時のブルジョア層の生活様式を如実に表しています。今とは異なり、当時はまだ職人技術やものづくりが細部へ生かされていました。一例を挙げると、緩やかに螺旋を描く階段の壁面に一枚一枚手作業で貼り込まれた小さな白いタイル、そして建物全体に共通して使用される2種類のドアノブは、このプロジェクトのために建築家がデザインし、Olivari社が製作しています。



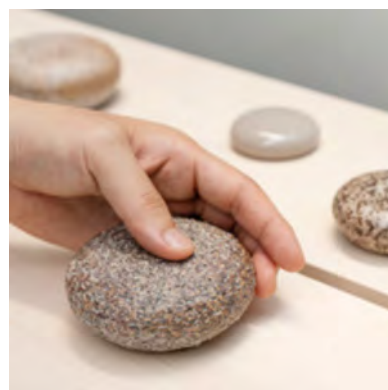
Olivari社のドアノブ。 © olivari.it

「Making Sense of Color」 - 色彩と深層心理

さて、中心地を後に、未到の地Porta Venezia Design Districtへ。A Google Design Studioと実験的なアートを手がけるラボラトリーChromasonicが共同で制作したインタラクティブなインスタレーション「Making Sense of Color」を体感してきました。世界を感知する上で重要な要素となる色が、グーグルの最新ハードウェアデザインの強力な側面であることを示す試みだそうです。ロケーションはGarage21、600平米の空間を有する廃工場です。インスタレーションの目的は、色彩を来場者へ見せるだけでなく体感させる、つまり色を視覚だけではなく五感のすべてを通して感じさせることにあります。少人数のグループで中に足を踏み入れると、そこには環境の動きに連動する没入型の色彩インスタレーションが設けられていました。半透明のパネルで仕切られた21個のボックスの内の一つに入り静かに音楽に耳を傾けると、周波数のリズムに呼応して色調を変えるLED光を心と体で感じることができます。グーグル・ハードウェア・プロダクト・グループの副社長Ivy Rossは、色彩は私たちの感情や精神を形作るだけではなく、日常の環境とより親密で奥深い接続を織りなす役割を担うことができ、深層心理と強固に結びつく要素だと語りま。このインスタレーションは、デザインをする上で、色彩を媒介に世界をどう感じ取り、それにどう反応していくべきかという問いを投げかけています。



© Edoardo Delille & Giulia Piermartiri
体験型インスタレーション「Making Sense of Color」のひとつ、色を聴く空間。



© Edoardo Delille & Giulia Piermartiri
異なる質感を触り、心に浮かぶ色を感じる体験。

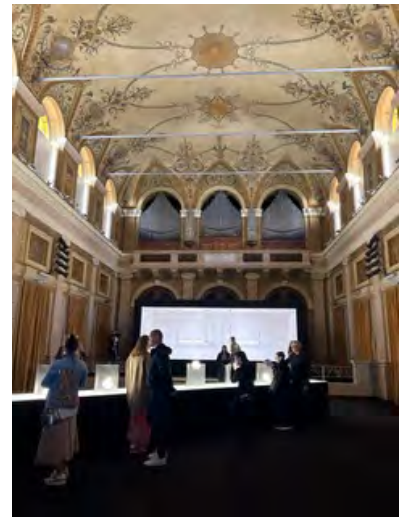
多彩な顔を見せるガラスの魅力

同じ地区に、19世紀前半に創設された視覚障害者のための教育機関があります。1892年に建設されたネオクラシック様式の建物へ移転して以降は、音楽院も併設されています。ここ

で、いくつかのインスタレーションが展示されていました。中でも、自然のモチーフを描くフレスコ画に囲まれた一階のSala Barozziと呼ばれるコンサートホールでは、歴史が刻まれた薄暗く重厚な空間の中で、照明器具の展示が開催されていました。ヴェネチアの伝統的なガラス工芸を受け継ぐMussati家が、ガラス職人の技術を保存するというビジョンを掲げて2013年に父と息子で創立したブランド「WONDERGLASS」の展示です。このガラスブランドは、過去10年間に影響を与えた世界中の最先端のクリエイターとコラボレーションし、革新的な技術と美しさを追求しながら、ガラスの新たな可能性を表現する斬新な作品を生み出しています。大きな空間の中央のテーブルに等間隔に並べられた一連の照明器具は、NENDOの作品「DUSK」。ブロンズガラスのシートを二つに折り、一点ごとに異なる位置に膨らませた柔らかな曲面で丸い電球を包み込み、硬い素材から作られているにもかかわらず、柔らかく暖かな空間をつくります。一列に並べられた7つの作品が、日本文化における深遠なる象徴である太陽へのオマージュとして、夕暮れの穏やかな輝きを表現するコレクションです。空間の奥に展示されているのは、ミラノサローネ本会場の会場デザインも手掛けているデザインユニットFORMAFANTASMAの「GRAFT」。計算し尽くされた合理的なデザインと、その対極にある個人の記憶を呼び起こすモノの融合から生まれる緊張感を表現した作品です。一昔前には日常で目にすることができたムラーノガラスの職人の手作りの花びらが見る人を幼少期へワープさせ、同時に、スチールを主体とする機能的なデザインの照明器具本体が現代を意識させることで、人間の中にある2つの異なる感覚が刺激され、このような要素を組み合わせることで不思議な美しさを醸し出しています。

2年前から、前述のプラットフォームが主催し、デザインコミュニティの投票によってフォーリサローネアワードが選ばれていますが、今年はこの地区で開催されたイベントが賞を獲得しました。15世紀に建造され、500年の歴史の中で次々と所有者が交代しながら、1935年よりミラノ県の県庁として使用されているIsimbardi宮殿で開催された、Lasvit社のインスタレーション「Re/Creation」です。Lasvit社は2007年に創業、ボヘミアガラスの技術を応用して、オーダーメイドの彫刻的な照明システムをつくりだ

すチェコ共和国のメーカーです。宮殿の中庭には、ガラスへ革新的なアプローチを行ない、ガラスと建築の関係を表現したモニュメンタルな空間が現れます。溶けたガラスが流し込まれることで生まれる様々な模様は、職人技術を結集し、ヨーロッパ最大のガラス窯でつくられたそうです。屋内では、スウェーデンのデザインスタジオClaesson Koivisto Runeによる、スカンジ



コンサートホールの中で開催された、WONDERGLASSの展示の様子。



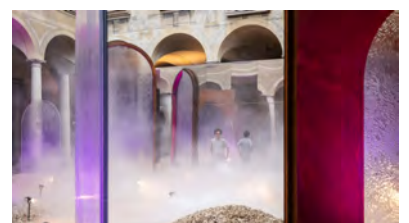
© wonderglass.com

太陽へのオマージュ、NENDOのテーブルランプ「DUSK」。



© wonderglass.com

FORMAFANTASMAのペンダントライト「GRAFT」は、職人技と合理的デザインの融合。



© fuorisalone.it

フォーリサローネアワードを受賞した、Lasvit社のインスタレーション「Re/Creation」。

ナビアデザインのエッセンスが凝縮された新作テーブルランプ「Nebula」、Jan Plechac&Henry WielgusのデザインによるLasvit社のアイコンックなペンダントランプ「Neverending Glory」を、ミラノ・スカラ座など世界五大シアターのゴージャスなシャンデリアのシルエットで形作った限定版「La Scala」、社内のシニアデザイナーMaria Culenovaが制作したインスタレーション「Bois de Cristal」をはじめとする、変幻自在な素材の魅力を充分に感じさせる数多くの作品に出会いました。



© lasvit.com

テーブルランプ「Nebula」。

Tortona地区 - 伝統と最新テクノロジー

フォーリサローネの発祥の地とも言えるTortona地区。そのメイン会場の一つ、Superstudio Piùでは、川島織物セルコン社の「百の黒 - A Hundred Black -」と題したインスタレーションが行われました。黒一色の空間へ、創業当時から継承されてきた伝統の西陣織の技術と現代のニーズに対応する量産技術を駆使し、今回のために延べ千回近くの試作を繰り返しながら完成された織物コレクション100点が展示されました。西陣織というと艶やかで煌びやかな織物を思い浮かべますが、この展示ではあえて黒に統一することで、織物の基本的な要素である素材、織り方、織模様の多様な組み合わせが生み出す妙を描き出します。一枚一枚の織物からは、表面の糸の輝きや織りのうねり、手触りや柄などそれぞれの明確な個性が浮かび上がり、時空を超えた世界観を感じさせていました。



黒と光に囲まれた空間、「百の黒」の展示風景。

最新デジタルの世界を身近に感じさせるデザイン、日常を楽しくするモノのデザインに最新テクノロジーを組み入れるとどうなるか、これらの実験を行ない続けているHABITS。二人の建築家が2004年に立ち上げた、ミラノとタイ国バンコクに拠点を置く工業デザインスタジオですが、家電製品からデジタル製品、産業機器、照明、IoT、UXインタラクション・インターフェースへ焦点を当て、機械エンジニアやビジュアルデザイナーなど多分野へアプローチ可能な建築家たちのチームにより編成されています。毎年この会場でプロトタイプを紹介してきましたが、今年のテーマ「DIGITAL DOMESTIC DIALOGUES」で初めて公表された4つの新作の内、単純に面白いと感じさせた作品はVisionariaです。手の中に収まるサイズのこのツールで、本を読みながら自分の好きなフレーズや気になる箇所をアンダーラインを引くようになぞると、Visionariaがテキストを認識し、専用のAIジェネレーターに送られ画像が作成されます。読み手の想像力の限界を超えて、言葉が新しい次元を出現させます。彼らが対象とするデザイン要素は、AI、エレクトロニクスの組み込み、新しい生活習慣の構想や情報の視覚化など多岐に渡りますが、技術の進歩に合わせてこれ



© superdesignshow.com

AIがテキストから画像生成し映し出すツール「Visionaria」。



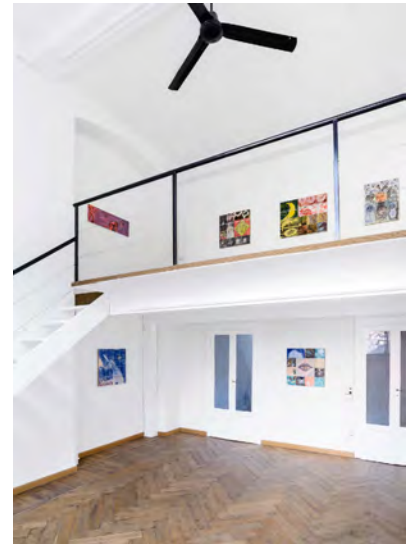
© habits.it

重さ (g) が光量 (lm) を定めるライト「1g1lm」。

からも、もっともっと面白いツールをつくりだしてくれることを期待します。

MiArtとデザインウィークの連携プレー

アートとデザインの間には、多くの共通項が存在しますが、今年は今現代アートとデザインをさらに融合させるプロジェクトがスタートしました。毎年デザインウィークの直前に3日間、近代・現代アートの展示会MiArtの開催があり、その延長線として、デザインウィークへ純粋なアートを導入するという趣向です。MiArtのアートディレクターNicola Riccardiは、その第一弾として、ミラノのアートギャラリーの中からいくつかを厳選し、それらを回るコースを作成しました。イベントを見て回る感覚で現代アートにも触れることで、フォーリサローネへの来訪者たちに新しい視点からミラノの街を散策してもらうアイデアです。また、同じアートディレクターのキュレーションにより、今年のテーマ「Materia Natura」を表現するビジュアルアートが制作され、Gae Aulenti広場で開催期間中に上映。制作には、リサーチやプロジェクトを手がけるクリエイターAndrea CassiとMichele Versaciが構成するグループEX.と、映画監Giorgio Ferreroが共同制作で、人間と環境の壊れやすい関係を5つの素材、丸太、氷の塊、溶岩石、大理石、スレートを通して語ります。今後の進展が期待されるコラボレーションです。



© galerie.gregorstaiger.com

アートギャラリー散策コースに選ばれたギャラリーの展示風景。

執筆者 略歴

池田美雪 インテリアデザイナー
武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒
Istituto Europeo di Design 建築インテリア科

1994年よりミラノ在住 個人邸の改築、パブリックスペースの設計に携わったのち
2005年より クリエイティブ・コンサルティング会社（デジタルゲーム、ウェブサイト、グラフィックデザイン、アプリ）の共同経営者として活動

デザイン・アートに関するプロジェクトコーディネイト、翻訳および通訳
mikedata.it